日本赤軍声明

2000年3月18日

アラブでの戦いの教訓を生かし、日本においても人民の戦いと共に進みます

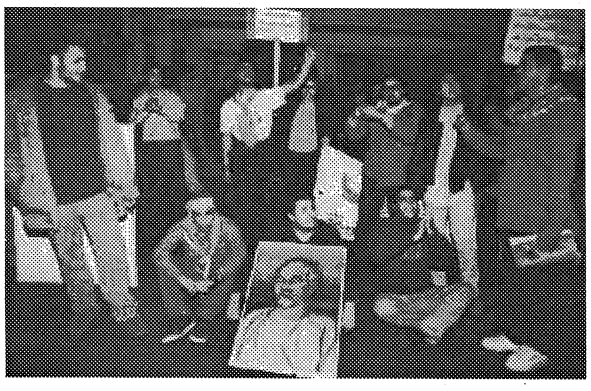
（見出し・編集部）

三月一七日、レバノン政府の政治亡命委員会は、岡本同志の政治亡命を認めると共に、他の日本赤軍同志に対して追放を決定しました。

一　私たち日本赤軍は、日本政府の経済制裁の執拗な攻撃にさらされながら、三月一日の送還拒否を決定した事に続き、岡本同志の政治亡命を認めたレバノン政府の決定を評価します。しかし同時に、四同志の追放が日本政府のシナリオによっているとは言え、アラブの一部の反動勢力との共同によって日本への追放に結果した事に抗議します。

レバノン政府の送還拒否、岡本同志亡命許可決定は、ひとえに、日本赤軍五同志支援の人々のたゆみない戦いによって勝ちとられた成果としてあります。私たち日本赤軍は、レバノン人民、弁護士、政治家、解放組織のたゆみない救援と連帯にまず全同志の名において心から感謝します。帝国主義勢力のグローバルな経済支配の現時代にあって、全同志に対する亡命を許容する条件が無いことを私たちは理解しています。むしろこうした時代にあっても、強力な人民支援の力で、正式な「送還」を阻止しつづけた、人民連帯の勝利をこそ誇るべきだと考えています。

二　日本政府は卑劣な手段でアラブ人民に敵対しつづけています。イスラエルの攻撃にさらされたレバノンの困難な経済状態につけ入り、送還を拒否された後も、アラブの団結、大義、主権を踏みにじってアラブ諸国を揺さぶり続けてきました。日本政府の姑息な動きは岡本同志と4同志を引き離し、送還拒否決定にも関わらず、経済援助を餌にアラブの反動勢力を利用して、「追放」のシナリオを描き、四同志を強制的に日本に拉致しました。アラブの歴史の中に、一方にはリッダ闘争の人民の連帯と、もう一方に金と虚言でアラブ政府、人民を愚弄した日本政府の犯罪が新に刻まれました。



日本政府の卑劣な「強制送還」へ抗議デモ（レバノン）

私たち日本赤軍は、そしてレバノン、アラブ人民は、こうした愚弄と暴挙を決して許さないし、決して忘れないでしょう。

三　岡本同志は、今亡命を許可され、しかし、隊伍を引き離され、ただ一人孤立した条件に置かれようとしています。イスラエルの獄中で受けた後遺症は、一人での生活を難しくしています。どんなになつかしい同志であっても、岡本同志と共に過ごす事が日本赤軍の私たちには許されません。岡本同志を帰国せざるを得ない状況に追い込む事、日本政府はそれをこそ望んでいます。私たち日本赤軍は、レバノン人民、友人達の支援と、日本人民、友人達の救援を引き続き願うものです。

四　私たち日本赤軍は、いつ、いかなる条件下にあっても、人民の戦いを共にし、戦場がどこに変わろうとも戦い続けます。四同志の帰国は、逆に日本での新しい戦いの始まりとして位置しています。

アラブ人民と共に、リッダ闘争の歴史の上に築かれた遺産を今、私たちはしっかり握りしめています。一つはリッダ闘争戦士達、アラブの先達が築いた「人々の為に労苦も命も厭わない」自己犠牲の精神です。そしてもう一つは、その自己犠牲によって築かれた徹底したヒューマニズムの人民の国際連帯です。この、世界の人々と共に築いた二つの遺産を握りしめ、人間に対する愛と希望を育み合う政治がある事を人民連帯としてこれからも育てます。私たちは歴史的遺産を継承し、日本人民の闘いに依拠し、世界の正義と公正を求める人民勢力の一部として、アラブの地での戦いの教訓を生かし、日本の地においても人民の戦いと共に進みます。引き裂かれた条件にあっても人民連帯は不滅に輝き、新しい世紀の希望の萌芽を築きつづけることを確信します。共に

救援アピール

2000年3月18日

1、岡本公三君の政治亡命を受け入れてくれたアラブ・レバノンの人々及びレバノン政府に深く謝意を表します。

1、和光晴生、足立正生、山本万里子、戸平和夫の4名を強制送還させた日本・小渕政府に強く抗議します。

岡本公三君たち5名に、献身的で力強い支援を続けてこられたアラブ・レバノン・パレスチナの方々に重ねて謝意を表します。

アラブ・パレスチナの大義を保持するレバノン政府を"資金援助"で買収しようとした日本政府の汚いやり方は破綻しました。この日本政府の手法に、アラブ・パレスチナの人々のみならず全世界の心ある人々から非難が続いている事実を私たちは受け止めます。

私たちウナデイコムは、和光君たち4名の救援をただちに開始し、同時に、レバノンに滞在する岡本君の生活一治療両面にわたって可能な支援を追求します。ここに、できるだけ多くの方々の協働を希求します。

ウナデコム
ベイルート5国際救援会日本センター

日本赤軍声明・2000年3月2日

五同士の送還拒否の尽力に感謝する今こそ公正で自律的な日本の国際社会参加を求めこ

（見出し・編集部）

三月一日、レバノン政府は、九七年来拘束されていた日本赤軍五同志に対する日本政府の送還要求に対し、それを拒否する閣議決定を行いました。

一　私たちJRAは、すべての同志の名において、その決定を歓迎し、まずもって送還阻止のために尽力したすべての人々に感謝の意を表明します。日本政府、アメリカ政府の圧力の厳しい条件の中で、勇気ある決断を下したホス首相とレバノン政府に感謝します。そしてまた、一九七二年以来、リッダ闘争を出発点として、血と汗と涙の団結によって築かれたアラブ人民と日本赤軍の歴史を引き継いで今日に至るまでねばり強い救援運動を展開しているレバノン、アラブ人民、政治家、解放組織、政府に感謝します。更に、日本公安警察の弾圧にさらされながら救援を続けている日本の人民、友人たちに感謝します。

二　私たちJRAはかつても「テロリスト」ではなかったし、現在も、これからも「テロリスト」ではありません。私たちはただ正義と公正を求め、世界の人々と共に立つ道を選択したがゆえに、アメリカを中心とした支配勢力によって「テロリスト」攻撃を不当に受けてきました。そして、今日の大国によるグローバルな経済支配の情勢下で、大国の「反テロ」制裁の脅しの前で小さい国々が正義と公正を貫く難しさを、私たちも知っています。レバノンにいるJRA五同志たちの今後の処遇問題が、複雑な条件に置かれていることも知っています。私たちJRAは、そしてまた当事者であるレバノンにいる五同志たちは、レバノン政府のいかなる決定に対しても自らの責任において決定を受けとめ、従う用意があります。

しかし今なお、イスラエルの長期占領と空爆の中で正義と公正が踏みにじられ続けています。こうした中で、レバノンの良心ある人々が、アラブの大義に基づく公正と正義を死なせないためにも、我が同志たちの政治亡命を求める戦いを継続しています。私たちJRAは、レバノン人民の力強い支持と連帯に感謝し、小さな国も大きな国も対等に正義と公正を自ら決定する道として、アラブの大義の原則に基づく政治亡命の実現を求めます。

三　日本政府は、一貫してアジアへの日本の侵略の過去に向き合った二一世紀のアジアとの共存に向けた責任ある態度をとっていません。同様に、イスラエルのアラブに対する侵略と抑圧の歴史に公正な立場を持たず、石油供給のためにのみアラブの利害を考えてきました。その結果、日本の公安警察の要求の実現のために、九七年ハリリ政権の一部の人々を買収してJRAを逮捕させ、さらに「援助」と引替えに「送還」に向けてレバノンへの内政干渉を繰り返してきました。今回のレバノン政府の「送還拒否」決定を機会に、日本政府は外交路線の誤りと破綻を学び、今こそ、公正で自立的な日本の国際社会への参加を求めます。

四　「和平交渉」は、イスラエルの暴力によって今、頓挫しています。イスラエルは占領を長期化し、和平交渉の前提となるアラブ領土の占領地からの撤退を行わず未だ居座りつづけるばかりか、民間施設の空爆を繰り返しています。アメリカ政府も、日本政府も占領政策が中東和平の妨害の「原因」であるにも関わらず、「占領」の結果、正義と公正を求めて抵抗解放運動を続けているレバノン人民勢力に対し、和平の妨害の「原因」であると非難しています。私たちJRAは、レバノン人民の抵抗解放運動の正義と平和を求める戦いを全面的に支持し、アラブ人民の戦いに連帯します。そして、正義と公正を求める世界の人々の戦いと共に進みます。

おわび

本紙前号に「電脳突破党結党宣言」を掲載しましたが、同党がインターネット政党であることを考えれば、同時にホームページアドレスを掲載すべきでした。あらためて、下記に記します。

http://zoro-me.com/miyazaki/